

《第五章・界（元素）を考察する。》

第三項 [界（元素¹）に法我を否定する] に三項目がある。[章の著述を説く]、[了義の教証と合わせる]、[意味を要約して章の名を示す] である。

第一項 [章の著述を説く]

ここに言う。「諸元素（基本構成要素）は否定していない故と、世尊によっても『大王よ。このプトガラである者は、第六元素である。』と、地・水・火・風・虚空・識の六元素と、それらの定義である堅・潤・暖・動・不遮・様相を知覚させるも示されたが、本性が無ければ定義を示したことは正しくないので、定義が有る故に、諸元素は本性として有る。それを視れば、界（元素）の如く蘊や處も本性として有る。

もし諸元素が本性として有るならば、他の二つもそのように有るだろうが、それらは本性として無い。「如何様に無いのか」といえば、これに二項目がある。[六元素が本性として成立したことを否定する]、[有無の辺見を叱責する] である。

第一項 [六元素が本性として成立したことを否定する] に二項目がある。[虚空の元素が本性として成立したことを否定する]、[その正理を残りの元素へも適用する] である。

第一項 [虚空の元素が本性として成立したことを否定する] に三項目がある。[虚空の元素において性相²と名相³を否定する]、[事物として・無事物として成立したことを否定する]、[否定のまとめ] である。

第一項 [虚空の元素において性相と名相を否定する] に三項目がある。[事相⁴を否定する]、[性相を否定する]、[まとめ] である。

第一項 [事相を否定する] に二項目が有る。[性相が当てはまることを否定する]、[それによって事相を否定したと示す] である。

第一項 [性相が当てはまることを否定する] に二項目が有る。[前後を考察して性相が当てはまることを否定する]、[性相の有無を考察して性相が当てはまること

1 元素：漢訳は「界」。ものごとの成り立つ基礎的な構成要素（[序論] 脚注 99 参照）。

2 性相：定義。

3 名相：被定義項。定義されるもの。

4 事相：性相・名相がその上に成立している、拠所となる例。

を否定する] である。

第一項 [前後を考察して性相が当てはまることを否定する]

経典より、地の元素を最初に説かれてはいるけれども、ここで第一に虚空の元素が本性として成立したことを否定したのは、世間において虚空は空虚であると公認されており、他の諸元素はそのように公認されていないので、公認された意味を通して公認されていないことを論証する為に、

「虚空の性相（定義）の以前に、」⁵

等を説かれた。

ここで「自他の派の誰も、性相より事相が先に有るとは主張しないので、虚空の性相の以前に虚空が無いと証成することは適正でない。」といえよ。

他派は性相より事相が先に有るとは主張しないので、ただそれが無いことのみを論証するのでは無い。

ならば何かといえよ、これは『ブッタパーリタ』より、

「もし、虚空の性相の以前に『虚空』というものが僅かに有るならば、それに『この虚空の性相とはこれである。』と示すことも正しいけれど、」

と、「その前後関係が有るならばそのように示すことは正しいが、無ければ正しくない。」と、後者⁶が合理であるならば前者⁷はそれに行渡るものであると示して、行渡る（範囲の広い）ものを否定する。⁸

それも、経典より「遮らない」を虚空の性相と説かれたことのみは自派でも主張するので、「対論者が、事相である虚空において、『遮らない』が性相に当てはまると説かれたことに対して、『自らの自性としての性相と名相である』と主張するようであれば、その（時間的な）前後関係がある必要がある」と示す。

そのようでなければならぬ理由とは、性相が当てはまる時は、三種（の時）に確定しているが、同時である場合に定義となることは

「性相と共にあるものに（当てはまるの）ではない」⁹

と否定する。性相が以前に有り事相が後である場合に性相（定義）が当たることと、その反対において性相（定義）が当たることの二つのうち、後者を否定することの方が難しい。（何故ならば）以前に有る「定義が当てはまる拠所」に、「当てはまる

⁵ 「虚空…前に、」：『根本中論』第5章1偈。

⁶ 後者：「そのように示すこと」。（虚空の）性相以前に存在する虚空に「この虚空の性相とはこれである。」と示すこと。

⁷ 前者：「その前後関係が有ること」。（虚空の）性相と、その以前に存在する虚空の二つに前後関係が有ること。

⁸ 「その前後…否定する。：後者（脚注6）は全て前者（脚注7）に含まれるので、前者を否定することによって後者をも否定する。

⁹ 「性相と…ない」：『根本中論』第5章3偈。

定義」が後に置かれることに対して、より強い疑問が起こるけれど、「(定義が) 当てはまる対象」が以前に無いと確定すれば、それ以前に(定義が)置かれたとする思い込みは弱い故である。然れば、性相(定義)の以前に事相が有ることのみを否定された。

もし「遮蔽遮断が無い」が、虚空に性相として当てはまるのが自性として有るならば、他の二時¹⁰に当てはまることは不合理である。従って、その性相より以前に有る事相である虚空に当てはめなければならぬならば、虚空の性相である「遮蔽遮断が無い」の以前に、(性相が)当てはまる拠所である虚空は僅かにも有るのではない故に、性相が何処に当てはまるとなろうか。

もし性相である「遮蔽遮断が無い」より虚空が以前に有ったならば、その時に性相が無いという背理になるが、そう見れば虚空も無くなることになる。(何故ならば)性相の無い事物—意味とは、如何なるものも、如何なる説にも有るのではない故である。

もし「先ず、性相(定義)が当てはまるということは有るが、その適応も事相に対してである故に、性相の適応が有るので、事相も有る。」といえよ。

「性相の以前に、性相の無い事物—(性相の無い)意味は無い。」と、既に述べた。そう見るのであれば、その性相が当たることになる拠所が無いので、性相が置かれることは無い。これは、『性相の以前に性相は無いけれど、性相が当てはまることは有る』という考えを否定する。

第二項 [性相の有無を考察して性相が当てはまることを否定する]

他にも、性相が(事相に)当てはまるのが自性として有るならば、三種を超えることはないが、それも、性相が無いものに性相が当たることは無い。(何故ならば)性相の無い現象は世俗としてもあり得ないので、拠所が無いものに当てはまることは矛盾する故である。

性相と共にある意味にも、性相が当てはまることは自性として有るのではない。(何故ならば)そこには性相が当てはまる必要が無い故であり、自らの本質として性相と共に成立したものに、再度性相が何をしようか。そのように成立していようと性相が(再度)当てはまるならば、常に性相が当てられることになる¹¹ので、限りが無くなるだろう。

それについて、「遮蔽が無い」等の性相は、事相である虚空などの「成立させる理由」であるが、それが世俗名称として有ることにおいては矛盾しないけれど、勝

¹⁰ 他の二時：性相と事相が同時の時と、性相が先で事相が後の時の二種の時間。

¹¹ 常に性相が…なる：性相が既にある意味に再度性相が当てられるならば、「性相のある意味の性相」となり、その上で再度「性相のある意味の性相の性相」となり、更に「性相のある意味の性相の性相の性相」…と限りが無くなるだろう。

義として成立したことにおいては正しくない。(何故ならば) 自らの本質として成立した同時に存在するものにおいて、相互関係したことは不適當であると多く説かれたので、自らの本質として成立した同時に存在する性相と名相には関係性が無い故に、性相が「成立させる理由」であるとは不合理である。これも、自らの本質として成立したならば自立的に成立し、自ら自身が独立した本質として存在しなければならないので、そう見れば、他に影響されたり、他に頼る関係性は不合理である。然れば、自性として成立したものが「成立させる理由」に頼るなら、如何なる時も(「成立させる理由」に) 頼らないことはあり得ない必要があるもので、限りが無くなるだろう。

性相と共にあるものと、性相が無いものより他においても、性相が当てはまることはない。(何故ならば) それがあり得ない故である。性相が無いことより反すれば性相が有り、有ることより反すれば性相が無いことになるので、性相の有無は正反対である故である。

ここでフクロウ派(バイシェーシカ派)が、「士夫(生まれた者)とは、命の實質に相對して性相は無いが、身体の實質に相對して性相が有る」と、異音同義より性相の有無を語るけれど、前述においてそれぞれを批判した論理を超えることはない。

第二項 [それによって事相を否定したと示す]

「仮にまた、事相に性相が当てはまるのが本性として有ることは否定したとしても、集合を否定したことで部分は否定されていない¹²故に、事相は自性として有る。」といえは。

性相が当てはまるのが自性として有るのでなければ、その時、事相が本性として有るとは合理とならない。(何故ならば) 性相が当てはまるという理由によって事相を設けなければならない故である。ここで君が、『『遮蔽遮断が無い』という性相を具える』という理由によって「虚空の元素は本性として有る」と示せば、それも性相が当てはまらない故に不合理である。しかしそう見れば、君の(主張する)「事相は本性として有る」は、何によって成立することが合理となろうか。

第二項 [性相を否定する]

もし『君は性相が当てはまることを否定したけれど、性相は否定していないので、性相は本性として有る。しかしそう見れば、事相も有る。』と思えは。

性相が当てはまらない理由によって事相が不合理であると示した時、事相が本性として有ることが合理ではなければ、それだけではなく、性相も本性として有るの

¹² 事相に…いない: 「事相に性相が当てはまること」が本性として有ることは否定したが、その部分である「事相」が本性として有ることは否定していない。

ではない。(何故ならば) 拠所が無い故である。拠所が無い性相は無い故に、事相が否定されても性相は本性として有ると語ることは、不合理である。

第三項 [まとめ]

何故ならば、一切の様相において考察したならば、性相が当てはまるとは不合理である故に、性相の拠所は(事相)は本性として有るのではない。「それ故に、拠所が無い性相もまさしく有るのではない。」と、前述での諸々の否定等をまとめた。

第二項 [事物として・無事物として成立することを否定する] に二項目がある。[本義] と、[反論を斥ける] である。

第一項 [本義]

「仮にまた、性相と事相は本性として無いと見るとしても、事物の本性である虚空とは有る。しかしそう見れば事相か性相であるとなるので、その二つも本性として有る。」といえは。

それについて、他宗教徒であるヴァイシェーシカ派等が虚空は実在物として成立したと言うが、自派(仏教徒)においては、毘婆沙師が虚空は事物であると主張する。それも、遮る一突き当たる触が否定されたことを虚空であると主張することにおいては、仏教徒内で(見解が)似てはいる。しかし、突き当たる触が否定されただけの絶対的否定であるならば、他に空間を空けることは適わない¹³ので、『虚空とは、形あるものに空間を空けるので、働きを為すことができる。』と考えて、毘婆沙師達は「虚空は事物である」と主張する。¹⁴

虚空が空間を空けたならばそのようでもあろうが、「他の形あるものに空間を空けた」とは、壺のような一つの有形が他の場所へ置き場を移動したことによってであり、虚空が空けたことは無い。(空間が) 閉められたことも、一つの有形が存在する置き場所に、他の形あるものは入らないので、まさしくそれによって(空間は) 閉められた。しかしそこに他の有形を入れる為に、以前に有るものが他へ行かなければならないので、空間を空けたならば「行き来」を承認しなければならない。

それらの正理と、恒常と事物の共通項に対する批判を示す諸々の正理によって虚空が事物であることが否定されておらず、虚空は事相として、「遮蔽遮断が無い」は性相として、自らの本質として無いとは既に示した。しかし事相と性相として以外の事物は有ることがないので、「虚空は事物として、本性として無い。」と否定し

¹³ 突き当たる触が…適わない：絶対的否定は変化しない恒常であるので、形有るものごとが存在する為の空間に働きかけることはできない。

¹⁴ 自派…主張する。：説一切有部は毘婆沙部の一部。毘婆沙部の教義においては、全ての有は実在であり、有(存在)と事物は同義語である。従って、有=事物が恒常と無常に分かれる。

たことは、虚空について説かれた諸々の正理は、残りの元素についても適用されなければならぬと御考へになられてのことである。

他の自派（仏教徒）実在論者達は、「突き当たる触を否定したのみの絶対的否定」を無事物であると主張するので、『そのような無事物として、自らの自性として有る。』と思うが（、それに説く）。

虚空とは、「突き当たる性質を持つ物質をただ否定したのみ」に置いた。

もし物質が自らの本質として有るならば、その時、空間のように、突き当たる物質をただ否定したのみでも自らの本質として有ることになるが、前述の正理によって物質の事物が自性として有るのでなければ、その時、何の事物が無い虚空であるとなろうか。（そうは）ならない。

もし『兎の角の事物が有るのではないことによる〈兎の角が無い〉という絶対的否定は、兎の角の事物が無くして有るのではないのか？否定対象である現象が無いことが、否定が無い理由であると言うことが如何様に正しいのか？』と思えば。

それは不等である。（何故ならば）世俗名称として単なる事物のみがあり得ないならば、壺の無事物も世俗名称として有り得ないように、勝義として単なる事物のみがあり得ないならば、突き当たる性質を持つ事物が無いことも、勝義として有り得ない」という意味である故である。

第二項 [反論を斥ける]

もし「事物の有無を考察する者である君は有るが、それ故に、考察対象である事物の有無も有る。」といえば。

そう見れば、事物と無事物を知り分析する行為者は、三種を超えることは無い。しかしそれも、事物として本性によって有るならば「事相・・・¹⁵」という偈によって、無事物として本性によって有るならば「事物が有る・・・¹⁶」という偈で既に否定したので、不合理である。事物と無事物の、その二つの合致しない現象の何れでもない第三種の考察者も無いので、考察をする者は本性として無い。

世尊も、

「諸事物を無事物であると知る者は、何時も全ての事物に執着するとはならない。何時も全ての事物に執着が無い者、その者は無相の禪定に触れる。」と、諸事物は本性が無いと知る者は、分析者等の全ての事物を、真実であると捉えないと説かれ、

「諸法は空であると思惟する、彼ら幼子達は悪道に入ったのである。諸法は空であると文字によって述べられた。それらは文字が無いと文字によって示された。寂静で熄滅の法を思惟する、その菩薩も、何時も現れることは無い。

¹⁵ 「事相・・・」：『根本中論』第5章5偈。

¹⁶ 「事物が・・・」：『根本中論』第5章6偈。

全ての戯論は心の分別（概念作用）であり、それ故に、諸法は不可思議と了解したまえ。」

と説かれた。

「諸法は・・・」という二行の意味は、空性について思惟することが悪道へ入ったと示すのではないが、「寂靜で・・・」という二行によって、否定した空について思惟するものである諦執（実体視）が、悪道へ入ったと示す。それも、「文字が無いと」という言葉によって、諸法（現象）は本性が欠如すると示すもの自体が、自らをも無我であると示すと説かれ、無事物に対して実体を否定するものは、真実として成立していないという根拠である。

第三項 [諸批判のまとめ]

「前述のように考察したならば不合理である故に、虚空とは、事物と無事物や、事相と性相の四つの何れとしても、自性として有るのではない。」と、諸々の前述をまとめた。

チベットで公認されている「名相（被定義項）」について、本論（根本中論）や多くの他のインド経論で「事相」と記されているが、その二つの対応語も同じなので、「定義する（性相）・定義される（事相、あるいは名相）」の一つの論式において、事相と名相が反するというのも不合理である。しかし他の者が、前述¹⁷を理由として「定義する（性相）・定義される（名相）・拠所（事相）の三つとすることは不合理である」と言うことも正しくない。（何故ならば）理由によって主張命題（成立させる対象）を証成するにあたり、主張命題（成立させる対象）・理由（成立させるもの）・証成する拠所（成立させる拠所）の三つが有るように、定義（性相）が被定義項（名相）を定義することにも当てはめてよい故である。

「そう見れば、叙述内容も三つにしなければならなくなる。」といえ、その通りである。対応語が一つなので同義であるならば、その内の片一方であると証明できないことは、多く見られる。

第二項 [その正理を残りの元素へも適用する]

虚空より他の、残された地等の五元素も、虚空と等しく事物と無事物や、事相と性相の自性として有ることが欠如していると知りたまえ。それも、「地元素の性相以前に、地は僅かにも有るのではない。¹⁸」や「それ故に地元素は事物ではない。¹⁹」と続けて、他にもそのように当てはめる。

¹⁷ 前述：チベット語で「事相」と「名相」の二つの言葉が、サンスクリット語の一語に対応すること。

¹⁸ 「地元素・・・ない。」：『根本中論』第5章1偈の言葉を変換させる。

¹⁹ 「それ故・・・ない。」：『根本中論』第5章7偈の言葉を変換させる。

阿毘達磨より、内外の諸處は認識対象・認識主体であることや、諸蘊は因果であることや、六元素の性相を示すにあたり、斯様に示した通りに自らの自性として有ると捉える思い込みを斥ける為に、その場その場の特別な諸々の正理を説かれた。しかし三つの諦執も三つの法（現象）に対して生じる²⁰ので、それを否定する正理も三つの法（現象）に対して示さなければならない故に、確定するのではない。

第二項 [有無の辺見を叱責する]

その四つの諸法（現象）として自性として有ることは不合理である故に、無知の眼障によって知恵の眼が衰えたことによって、（輪廻の）無始より事物が有る・無い等の誤った見解に慣れ親しんだ、解脱に沿って行く無本性を誤り無く見る道より衰えた小心者は、知恵が劣ることから最勝に深甚な縁起生を了解していない。なれば、諸事物を有一恒常や、無一虚無であると視ることで心の眼が覆われた彼らは、視られる対象である涅槃が尽く熄滅し寂靜の定義をもつ、一切の概念作用から離れ、知と所知の一切の戲論より退いた、まさしく空の本性をもつ勝義の本質を見ることはない。

『ブッダパーリタ』より、蘊界處が無ければ、「勝者仏陀が概ねそれらを始めとして法を示されたことが無意味となる」という論難への返答として、

「我々は有無の二辺を掃うことを示すけれど、それらが無いとは言わないので、我々にとって法を示されたことは無意味にはならない。有無の辺を見る者にとっては、法を示されたことは無意味となる。（何故ならば）それらの見解を具えれば、涅槃を得ないだろう故である。」

と説かれ、（三章・四章・五章の）三章ともに当たる弁駁である。

第二項 [了義の教証と合わせる]

「六元素において性相・名相や、事物の有無の本性を否定したことも、論争によってのみではなく了義の経証によって成立したことから、本章によって、元素に本性をそのように否定した一切の善説を説明したまえ。」と示す為に、了義の教証と合わせた一部を述べれば。

有無の辺執見に留まるべきではないことは、以前『三昧王経』等を引用した如くであるが、『殊勝梵天請問経』よりも、

「内の地の元素であるものと、外の地の元素であるものは、不二の意味である。それも、如来が般若と智慧として不二であり、二つに分かれること無く、同一性相（定義）であるとはこれであり、性相無く、顕かに完全に成仏された。」

²⁰ 三つの…生じる：三つの法（現象）とは、處・蘊・界（元素）。三つの諦執とは、處・蘊・界（元素）それぞれを真実として有ると思いつく三つの実体視。

と説かれ、また、

「世間とは虚空の性相であり、虚空にも性相はない。それ故にその者がそれを了解することによって、世間の法（現象）に汚されることはない。」

や、『文殊遊戯経』よりも、

『娘よ。諸元素を如何様に視るのか？』娘が言った。『文殊様。このように、例えば三界が劫火によって燃え尽きたならば、灰さえも無いようにです。』

と説かれた。

そのように本章の諸々の正理は、それらの善説や、特に「諸現象は性相や性相の拠（事相）と離れる」と説かれた一切を視る眼であると知り、その眼を尽く清めたまえ。

第三項 [意味を要約して章の名を示す]

諸界（元素）の性相・名相や事物の有無を説かれたことに対し、名前（言葉）としての世俗名称に従って設けたのみではなく、自らの本質の力によって存在するならば、性相・名相等として設けられるとは適わないと、正理によって決定された意味を確認したまえ。それから、名前という世俗名称に従って設けたのみにおいて、性相・名相や、事物が有る・無いと置くことが殊更合理である仕様で、二諦の諸々の意味を確認したまえ。

「界（元素）を考察する」という八偈の我性である、第五章の解説である。